

第3回 国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区 体験的歴史学習基本構想検討委員会 主な意見と対応方針

項目	委員意見	対応方針
体験的歴史学習のテーマ・学習分野・手法等について		
テーマ・学習分野について		
	<p>これまでの議論を踏まえてよくまとまっている反面、たくさんの要素を盛り込みすぎて総花的になっている。今後はメニューの中から目玉となるものをつくっていくべきである。(三輪副委員長)</p>	<p>P.18の「1)体験的歴史学習の分野」にあるとおり、「キトラ古墳とその保存・修復」、「渡来人のもたらした技術・文化」、「飛鳥の歴史的風土の保全」の3つの学習分野を柱にして、飛鳥地方の既存施設との棲み分け及び連携に留意しながら展開していきます。</p>
	<p>あまりテーマを広げると大変であるため、橿原考古学研究所附属博物館や飛鳥資料館等の既存施設との連携・分担のもとに検討するべきである。(河上委員)</p>	<p>また、各学習分野において目玉となるものをつくるよう計画・設計段階で留意していきます。</p>
	<p>渡来人や渡来文化は、研究があまり進んでいない分野であり、日本人のアイデンティティに関わってくるため取り扱いが難しいテーマである。渡来文化がただ受け入れられたというだけでなく、日本古来の文化の継承や、渡来文化との融合等の視点を明確にする必要がある。(木下委員)</p>	<p>文化財部局にもご意見を頂きながら、渡来人に関する研究成果に基づき、明確にわかっている部分と議論の余地のある部分を区分して、誤解を与えないような形で表現できるように努めます。</p> <p>また、P.18「体験的歴史学習の分野と項目」の分野の「渡来人のもたらした技術・文化」において、日本古来と渡来の技術や文化が融合した視点を盛り込むことを明確にしました。</p>
	<p>本地区は渡来系の遺跡が残る飛鳥西南部に位置するだけでなく、高松塚古墳等と一体的に陵墓の地として位置づけられる。このため、歴史的な空間の取り扱いは、もう少し広いエリアで捉えてはどうか。(木下委員)</p>	<p>P.11の「2)国営公園キトラ古墳周辺地区の特性」の「飛鳥中心部から離れた西南部に位置」において、飛鳥西南部は終末期古墳や渡来系の遺跡の集積する地であることを記載します。また、当該地域は多くの陵墓や極彩色壁画を有する古墳などを含むエリアであることを記載します。</p> <p>また、これを受けてP.18の「体験的歴史学習の分野と項目」の分野の「キトラ古墳のなりたち」において、「飛鳥の古墳とキトラ古墳」の項目を追加しました。</p>

手法について	
<p>来園者の大半は観光客であると考えられる。観光客が「何気なく訪ねて、否応無く理解する」ための手法・プログラムを検討する必要がある。開園前から効果検証等の社会実験を行ってはどうか。(吉兼委員)</p>	<p>開園前イベントプログラムの実施を今後も継続的に実施し、関係団体や利用者の意見を十分に反映していきます。また、P.16の「(2)体験的歴史学習プログラムの設定方針」の2点目にあるとおり、来園者が目的外の学習内容についても関心を持つ「しかけ」をつくるよう、内容・手法について計画・設計段階で留意していきます。</p>
<p>文化財の展示について、ガラスケースに入れた展示だけでなく、自由に触れる展示など他所ではやってないような、枠に捉われない新しい展示を目指してもらいたい。(三輪副委員長)</p>	<p>文化財部局にもご意見を頂きながら、ハンズオンやバーチャルリアリティ等を用いた効果的な展示手法について計画・設計段階で留意していきます。</p>
文化財の展示について	
<p>体験的歴史学習のテーマの一つが古墳壁画であるならば、キトラ古墳壁画とともに高松塚古墳壁画の取扱いについても考える必要がある。(河上委員)</p>	<p>文化財部局と連携しながら、高松塚古墳壁画を含む東アジアの壁画や天文図の比較展示について、手法も含めて計画・設計段階で留意していきます。</p>
<p>高松塚古墳壁画については、文化庁において修復後の行方が定まっていないため、現段階では検討できない。(建石協力委員)</p>	
<p>発掘主体ごとに出土資料の展示を行っている現況を鑑み、体験学習館は関係行政機関の共同運営のもと、飛鳥地方全体の成果を展示できるような施設としてはどうか。(猪熊委員)</p>	<p>村内の出土資料の展示については、体験的歴史学習の学習分野である「キトラ古墳とその保存・修復」、「渡来人のもたらした技術・文化」、「飛鳥の歴史的風土の保全」の3つの学習分野に関連する資料の展示を基本として、今後検討していきます。</p>
<p>村内の出土資料も体験学習館に展示してはどうかとの意見もあるが、体験学習館の展示の核となるのはキトラ古墳の壁画である。壁画以外に何を展示するかについては、既存施設との連携を十分に取りながら、今後検討するべきである。(平野委員長)</p>	

	<p>体験的歴史学習を実現するためには、たくさんの専門家が必要である。文化財だけでなく、明日香の民俗等についての専門家も学芸員として体験学習館に入れてはどうか。そして、毎年体験学習館でイベント等についての企画会議のようなものができるといい。(河上委員)</p>	<p>関係機関と協議・連携しながら、学芸員の適切な配置について、その可能性を含め検討していきます。また、P.35の「2)イベントプログラムにおける連携イメージ」を基にして、イベントプログラム運営組織のあり方について、計画・設計段階で検討していきます。</p>
<p>展開方策について</p>		
	<p>それぞれの機能をただ配置するだけでなく、機能同士を有機的につなげて、各エリアや施設をどのように関係づけていくかが課題である。(足立委員)</p>	<p>P.30の「2)地区内外への展開」にあるとおり、各機能を有機的に連動させるよう、ソフト・ハード面について計画・設計段階で留意していきます。</p>
<p>施設の整備について</p>		
	<p>飛鳥・藤原地域が世界遺産の暫定リストに掲載されていることを踏まえ、本地区の整備についても、世界遺産のオーセンティシティ(真正性)を視野に入れて検討する必要がある。(三輪副委員長)</p>	<p>ご指摘のとおり世界遺産の登録において重要なオーセンティシティ(真正性)に配慮した整備を進めていきます。</p>
	<p>檜隈寺跡周辺について、来園者が往時の風景を体感でき、地区の景観的なシンボルともなるように檜隈寺跡の伽藍を復元してはどうか。(猪熊委員)</p>	<p>バーチャルリアリティ等、地区の目玉となる手法の導入も視野に入れて、計画、設計段階で検討していきます。</p>
	<p>復元は現実的に難しい面もあるので、地区の目玉という意味からも、バーチャルリアリティ等の手法を検討してはどうか。(三輪副委員長)</p>	
	<p>体験工房の位置は、檜隈寺跡に隣接するため、もう少し離れたほうがよい。また、来園者がここに本当に工房があったと誤解しないように配慮が必要である。(西藤協力委員)</p>	<p>体験工房については、ご意見を踏まえつつ、利用動線、景観、敷地状況、インフラの設置可能性等に配慮した上で、計画・設計を進めます。</p>

<p>駐車場から体験学習館やキトラ古墳へは、地下道を通して村道を渡るしかなく、アクセスが悪いのではないか。(関委員)</p>	<p>来園者の安全性確保の観点から、地上横断は困難と考え、地下通路による動線計画としています。文化庁と連携しながら、駐車場から体験学習館やキトラ古墳へアクセスしやすくなるよう、計画・設計段階で留意していきます。</p>
<p>周辺の地域に田畑があるのに、田園環境保全ゾーンに柵田を残す必要は無いのではないか。(河上委員)</p>	<p>田園環境保全ゾーンは農業体験等の参加型のイベントプログラムを展開するゾーンです。また、P.30の「2)地区内外への展開」にあるとおり、当該ゾーンでの活動を地域での景観保全活動に発展させることも視野に入れています。</p> <p>開園前イベントプログラム等の試行的な取り組みを踏まえつつ、体験的歴史学習の学習分野の一つである「飛鳥の歴史的風土の保全」への理解を深めることができる展開にしたいと考えています。</p>
<p>多様な主体の参画による管理運営について</p>	
<p>管理運営のあり方について</p>	
<p>ユーザーがいつ来ても楽しめる、飽きの来ない「生きている歴史公園づくり」が重要であるが、成功するか否かは管理・リフォームでどう対応していけるかに尽きる。(三輪副委員長)</p>	<p>P.35の「2)イベントプログラムにおける連携イメージ」を基にして、イベントプログラム運営組織のあり方について、計画・設計段階で検討していきます。</p>
<p>今後も様々な発見やニーズが生じることが想定されるが、変化に柔軟に対応していける管理運営組織をつくる必要がある。(足立委員)</p>	<p>また、変化に対応した企画展示ができる施設整備になるよう、計画・設計段階で留意していきます。</p>
<p>地域との連携について</p>	
<p>「つくりあげていく公園」「育てていける公園」というところに魅力を感じる。「飛鳥方式」として、開園前からの地域との連携など、既存の公園でできなかったことに取り組んでもらいたい。また、開園後も、地域の参画を促すためにハードルを低いままにしてもらいたい。(吉兼委員)</p>	<p>開園前イベントプログラムの実施を今後も継続的に実施し、開園後のイベントプログラムの実施につなげます。将来的には、P.34の「1)イベントプログラムの段階イメージ」を基にして、地域の活動団体やリピーターが体験的歴史学習の管理運営の一翼を担えるよう、計画・設計段階で留意していきます。</p>
<p>公園整備と村の活性化をどう連携させていくかが課題である。管理運営には市民が参画できるようなあり方を模索してもらいたい。(三輪副委員長)</p>	

<p>管理運営への市民参画は、単なるボランティアではなく、どのような展開がなされるのか期待する。例えば、管理運営の中核を担うようなものや、NPO、アウトソーシングなど様々な形態が考えられる。(三輪副委員長)</p>	<p>管理運営への市民参画のあり方については、開園前イベントプログラムの継続的な実施を通じて、計画・設計段階で検討していきます。</p>
<p>本地区の整備に伴い、公園区域内外の景観の変化が懸念されるが、地域と連携しながら考えていくべきである。(平野委員長)</p>	<p>ご指摘のとおり公園区域内外の景観の変化については、関係機関と連携しながら考えていきたいと思ひます。</p>
<p>施設の運営について</p>	
<p>村の活性化のために、体験学習館は収益施設として運営し、村民の雇用の場となるようにしてもらいたい。今後は施設の料金徴収についての議論も必要である。(関委員)</p>	<p>体験的歴史学習の展開は、多様な資源や人材を生かすという点で地域活性化につながることを目的としています。料金徴収については、今後、計画段階で具体的に検討していきます。</p>